口蓋扁桃摘出術後にToxic Shock Syndrome様症状を呈した症例

清水俊行[1)]　庄司育生[1)]　山田良宣[2)]　洲崎春海[1)]
1）昭和大学医学部耳鼻咽喉科学教室
2）昭和大学横浜市北部病院耳鼻咽喉科

【はじめに】Toxic shock syndrome（TSS）は，黄色ブドウ球菌の産生するToxic shock syndrome toxin-1（TSST-1）菌体外毒素により発疹，下痢・嘔吐，ショック，DICなどを来たす多臓器障害である．耳鼻咽喉科領域では鼻・副鼻腔手術後に続発した例が報告されており，重篤な経過をとりときに致死的となる疾患である．

【症　例】26歳，男性．繰り返す扁桃炎のため，2004年1月7日に両側口蓋扁桃摘出術を施行した．術後1日目より重度の嚥下障害があり，唾液を飲み込むのも困難であった．術後4日目に突然高熱を発し，不穏，錯乱といった精神症状が出現した．WBC14500,CRP32.5と強い炎症反応もみられ髄膜炎や創部感染に伴う敗血症を疑ったが,神経所見に乏しく創部からはMRSAが検出されたが血液培養は陰性であった．術後5日目にはクレアチニンの上昇，FDPの増加のほか血圧低下を認めた．創部のMRSAによるToxic shock syndromeを疑い，昇圧薬とガンマグロブリンの投与を行った．その後全身状態は順調に改善し，1月24日退院となった．

【考　察】本症例では血中エンドトキシン濃度は5.0pg/ml未満と陰性であったが，経過よりToxic shock syndrome（TSS）が強く疑われ，免疫グロブリン製剤の投与が有効であったと考えた．